後であった。

2　彼の仕事

倉庫から荷物を出し、出入り口の重いドアをうんこらしょと閉めたとたん、瓜の漬物に似たなまっちろいフロアマネージャーの顔と売り場主任の生意気な顔とに出くわした。

村上隆一は腹の中で舌打ちした。彼らとの間に距離があるのを幸いに気がつかないふりをしたいところだったが、真正面からマネージャーと目が合っては今さらそれもできない。首を前へ突き出すようにして会釈する。

何事かを話し込んでいたらしい二人が話題を変えた。

「確か、彼はあなたの下の……」

「資材の村上です。呼びますか。……村上さん」

案の定、生意気な顔に輪をかけた生意気な口調で名を呼ばれた。

「ちょっと。村上さん」

ドアの閉まり具合を確かめているふうな態度を作っていた村上は、あきらめてドアハンドルから手を放した。フロアマネージャーと主任は店舗と倉庫を結ぶ中継地のフロアへ立って、呼んだ相手が自分たちのもとへ参じて来るのを当然のように待っている。

「はいー」

しぶしぶとそこまで足を運んでいく。マネージャーが待ちきれずに声をかけてくる。

「勉強のほうは進んでますか」

訊かれると思った。

「はあ、まあぼちぼちです」

彼らの前へ立つとユニフォームである黄色い作業上着の裾を引っ張りながら村上はかしこまった。主任も一応はネクタイを締めているが、その上へ着ているのはやはり同じユニフォームの作業着だ。胸のネームプレートにひらがなで「あきば」とあった。村上は当然「むらかみ」である。

一人スーツ姿であるフロアマネージャーが白い顔に上品な微笑を浮かべた。

「試験まであとひと月ですね。村上さんは今回が初挑戦とか。能力試験と言ってもAコースでは一般的な常識を見る問題が出題されるようですから、気楽に挑戦してください。順次、B、C、と受験を重ねていけば実務を生かせる場面もあるでしょう。まずは気楽に」

「はあ」

胃が重くなった。

もの柔らかい口調でさらに毒にも薬にもならない励ましの言葉を並べたあと、フロアマネージャーは上階へ向かう階段へと立ち去った。売り場主任の秋葉は後ろ姿も見送らない。さっさと背を向けると、もう行こうと村上を先へ促がした。

それで村上はドアの前に置きっ放しだった段ボール箱の荷物を肩

へ担ぎ、秋葉とともに売り場店舗へと歩き出した。
村上よりもやや身長は低いが、まだ二十代の秋葉は体に余分な肉もつかず歩く姿も颯爽としている。背筋を伸ばしてまっすぐに前方を見る。職域以外のよけいな物には目もくれない。ぴりぴりとした自信や責任感を常に体から放っている雰囲気をさせる男だ。
「フロアマネは気楽にと言われてましたが、あまり気を抜かないほうがいいです」
秋葉はマネージャーの言葉尻を捕らえた。
「一般常識とは言っても大卒の就職試験クラスの問題は出ます。なめてかかると失敗しますよ。Aコース問題くらいでつまづいてちゃ、そのあと実務問題で挽回しても確実にこれからに響きますからね」
そりゃあんたはね。村上は目をあげてなにもない宙を見る。
大学を卒業後に現役で本社へ就職したいわゆるキャリアの秋葉と、地方店のひとつへ中途採用された村上とでは、そもそも上昇志向の度合いが違う。いろいろな部署で経験をつんで上へ登っていく秋葉にはコース試験も大事だろうが、契約社員からこの店へやっと正式採用された状態の村上には、上どころか横への異動さえあるのかどうか疑わしかった。AもBもないという気がしている。
店へ入ると店内BGMが流れ、レジ場に人の動きが見えた。
秋葉は売り場センター通路を進んでいく。
「あとで売り場改装の打ち合わせに外部から人が来ますから、今日はもう売り場から動かないでください」
村上へ声をかけて、そこから各売り場を見回っていくために一人先へ歩き出した。
「へいへい」
肩の荷物を揺すり上げ、村上はホームセンター内の持ち場へ行く。資材の加工コーナーで客を送り出していたアルバイトの女性が村上に気づいてこちらを見返った。売り場の店員は皆ユニフォームの黄色い作業ジャンパーを着用することになっているので、アルバイトであるこの中年女性も、村上や秋葉と同じ上着と「とみなが」のネームプレートを身につけていた。客を送ったあと彼女は村上を追ってきた。
「倉庫にあったんですか？　あそこからここまで担いで来たんですか？」
「うん。台車が出払ってたから」
「重かったでしょう。すみません」
気の毒そうに言いながら、村上のために作業控え室の目隠し用アコーディオンカーテンを開けてくれる。
1メーター四方ほどの段ボール箱を村上は「軽いよ」と作業場の床へ投げ出した。
「ウエスの10キロ箱くらい、大したことないさ」
笑顔で答えた。
こういうコザコザとした雑用にも慣れた。対面式での販売業務もずいぶん上手くなったと自讃している。渉外担当の営業マンとして外を飛び回っていた村上には、新しい職場で新入社員がやるような現場仕事をやることは最初戸惑いもあったのだが、初心忘るべから

ず、商売の基本はどこであろうと同じと考え直した。与えられる仕事のある事が幸せだ。一度職場を失った身にはつくづくとそう思えた。その甲斐があってか一年以上続けた契約社員からこのたびやっとの本採用だ。

そんなおれにまで、なぜ能力試験なんか受けさせるかな。面倒だと思った。

同じ業種にもかかわらず会社が違えば仕事のやり方がまったく違った。以前の会社なら成果主義とはいってもスキルアップのための社内試験などという七面倒くさいものもなかった。再就職したこの会社でやっと仕事に馴染んできたと思ったところへ、これだ。開かれた実力主義を会社は強調したいのだろうが村上にそれほどの野心はない。野心もなかったが、現実に昇進の可能性も低かった。行けて現場の責任者くらいだろうと思う。

それでも結構。仕事をしに来てるんだから仕事だけをさせてくれないものか。と愚痴めいた感想を村上は抱く。

売り場に立っていると、作業場にいたアルバイト女性の富永がカーテンから出てきた。そして備品を載せた店舗用のワゴンの前へしゃがんでトレーの中を漁り始める。彼女は村上を振り返らずに声を寄越した。

「改装の準備って、もう今日から始まるんですよね」

「うん」

「午後からすぐですか」

「たぶんね。あとで外部の人が来るって主任が言ってたから」

「じゃあ、それまでに急いで掃除済ませとかないといけませんねえ」

売り場の配置をあれこれと言われる前に、目立つところだけでも掃除をしておこうと提案したのは彼女だった。清掃は毎日やっているが細かいところまでは目が届きかねる。部外者にそういう粗を見られるのが恥ずかしいということらしい。

「なに探してるの、富永さん」

女性はまだワゴンのトレーを引っ掻き回している。眉がへの字になっていた。

「紐切り用カッター、どっかやっちゃったみたい。ヒナちゃんに持ってないか訊いて、貸してもらおうっと」

「わざわざいいよ、大型カッターがあったろう」

来店客がコーナーを回って近づいてくるのが見えた。持ち場を離れかけた富永は足を止めた。

「作業場にあったと思いますけど」

「それでいい。おれがやるよ」

交代して作業場へ行った。大型カッターは引き出しの中で見つかった。カッターを手にした村上は段ボール箱を前へ据えて腰を屈めた。箱の中身は雑巾代わりに使うためのウエス布である。十文字に掛けられた梱包用のＰＰバンドが箱へ食い込んでいる。箱の角とバンドの隙間へカッターの刃を差し込んで力を入れた。水平に引くと固い紐は断裂音と共に勢い良く弾けて切れる。もう一本のバンドにカッターを入れていると、背後でカーテンが開いた。

「少し時間が早いですけど、いいですか。村上さん」